

高 橋 学

1 はじめに

1973年、湯沢市山田地区内の丘陵地緩斜面で宅地造成が行われ、重機で表土を除去した際に多量の縄文土器・石器などが出土した。これを発見した地元の人が、みかん用のダンボール(15kg詰)で1箱弱採集したという。その後のいきさつは不明であるが、遺物は未洗いのまま当時筆者が通っていた秋田市立西中学校にもたらされたのである。採集者と寄贈者が異なることなどから、その後の聞き取り調査によっても遺物の出土地点(遺跡名)については明らかにできなかった。

このような経緯もあり、長らく発表の機会を失っていたが、遺物の資料価値を鑑み、ここに遅ればせながら公にすることとしたものである。

2 湯沢周辺の遺跡

湯沢市を包み込む秋田県南東部の雄勝・平鹿地方は、東を奥羽山脈に、西を出羽山地に囲まれた南北に長い横手盆地の南部に位置している。盆地中央部には雄物川が悠々と北流している。

この地域は縄文時代の遺跡が数多く周知されており、秋田県の早期の遺跡を代表する岩井堂洞窟(雄勝町)を初め、後期の土壌墓群を検出した八木遺跡(増田町、第1図8)、晩期終末の土器・土製品(土偶など)・木製品(朱漆塗りの櫛)等を出土した鍔田遺跡(湯沢市、同図1)などを挙げる事ができる。また、これから報告する遺物の帰属する中期の遺跡では、欠上り遺跡(稲川町、第1図9)、宝竜堂遺跡(十文字町、同図7)があり、それぞれ2度ずつ発掘調査が実施され、中期初頭から前葉を中心とする時期の遺跡であることが判明している。前出の八木遺跡でも少例ながら中期中葉の竪穴住居跡などと該期の土器も検出されている。

本資料の出土地である山田地区(第1図の南西部)には、遺跡地図によると数箇所の縄文時代の遺跡が周知されているが、いずれも後期か晩期の遺跡であり、中期遺跡の登録はない。^(註1)

湯沢市山田出土の縄文土器



番号	遺跡名	所在地	時期	番号	遺跡名	所在地	時期
1	鏡田	湯沢市松岡	晩期	2	木津根崎Ⅱ	湯沢市岩崎	前・中期
3	鶴巻	湯沢市八幡	中期	4	掬ノ上	羽後町貝沢	中期
4	杉の宮	羽後町大久保	前・中期	5	大久保	羽後町大久保	中期
7	宝竜堂	十文字町上鍋倉	中期	8	八木	増田町増田	後・中期
9	欠上り	稲川町川連	中・前期	10	土沢Ⅱ	湯沢市山田	晩期

第1図 湯沢周辺の主な縄文時代遺跡 (●印は中期の遺跡)

3 出土遺物－土器－の概要

山田地区で出土した遺物は、全て縄文時代の所産と考えられ、数点の剥片以外は土器である。土器は細片化した資料が多く、接合・復元しても全体の形状の知れるものはない。ここでは、地文以外に文様等が施されている土器片を中心に抽出し、報告することとする。

土器を一覧すると、いわゆる大木式土器と円筒土器上層式に類別することができる。前者を第1類土器、後者を第2類土器とし、出土量の多い前者については、主に施文手法に着目して細分し記述を進めたい。

第1類土器（第2図1～第4図61）

本類土器に認められる地文以外の文様の施文手法は、次のように観察できる。すなわち撚紐（縄文）の側面圧痕文、粘土紐貼付による隆線（帯）文、ヘラ状・棒状工具あるいは半截竹管による沈線文を主体とし、これに小例の刻目文、刺突文、研磨による無文土器が加わる。主体となる文様は単独で施文される場合と併用される場合がある。

A種－刻目、刺突が文様の主体を占める土器（1）。

1は出土した土器の中で一際異彩を放つ。口縁部の丸みを帯びたプロポーションは、深鉢形土器のキャリパー部分と見られ、裾広がり底部となる器形を想定できる。口唇部の折り返し状の肥厚部は特徴的である。文様の施文順序に従うと、次のようになる。口唇部から体部に隆線を垂下させ、端部で円を作る。この隆線上にはヘラ状工具による斜位方向の刻目を加える。隆線部分を除く口縁～体部に樹枝状の細い沈線を引く。これに樹葉を想起させるような平面楕円もしくは三角形の刺突を施す。さらに径8mm前後の尖頭工具を右回転させながら刺突を加えている。色調は黒褐色～褐色を呈し、胎土には径1mm前後の砂粒を比較的多く含んでいるが、焼成は良好である。本種土器はこれ1例のみである。

B種－半截竹管を施文工具とする土器（2・3）。

本種には半截竹管を用いて沈線を描出するもの（2）、「C」字状（爪形）の刺突を施文するもの（3）の別がある。2は隆線により区画された内側に鋸歯状の沈線、口唇部下の幅広の隆線（帯）上にも平行沈線を施している。3は無文化された器面に隆線が貼付され、横位に爪形の刺突列が巡る。内面の調整を観察すると、本群土器の大部分は比較的丁寧なミガキがなされている場合が多いが、3は指頭による粗い仕上げとなっており、指をあてた部分が凹状に窪んでいる。

C種－撚紐（縄文）の側面圧痕の認められる土器（4～13）。

本種には、①地文に縄文圧痕を単独で施文する場合（4～8）、②隆線に沿うように縄文を押圧する場合（9～11）、③隆線上に縄文を押圧する場合（12、13）がある。

①は4、5で浅鉢形、6は径の小さい円筒形を呈する鉢形土器と考えられる。縄文は横位施

文を主とし、8のみが横位の縄文圧痕間に短い縦位の圧痕を加えている。使用の原体は5でLR、他はLである。②の9は、キャリパー形を呈する深鉢形土器であり、隆線を弧状に配する構図を採ると思われる。10は隆線を矩形に貼付している。使用の原体は9、10でLR、11はLである。③は小片であるが、12は口縁部に折り返し状に貼り付けた隆線(帯)上にLR縄文を、13は体部に貼付した隆線(帯)上にL縄文をそれぞれ押圧している。

D種－隆線のみで文様を構成する土器(14～16)。

14、15は同心円ないしは渦巻きを、16は鋸歯状に垂下させた隆線を貼付している。14は胎土に砂粒を多量に含み焼成も良好とは言えず、隆線の貼付も雑になされている。

E種－隆線と沈線の両者を施文する土器(17～25)。

本種は基本的には隆線に沿うように沈線が施文されている土器である。17～19はキャリパー形を呈し、17は口縁部文様帯に連続する弧状(波状)の区画文を配している。21の隆線(帯)上には指頭様の圧痕が付される。22、23は縦位に展開する隆線に沿わせて沈線を加えている。25は「Y」字状の隆線とこれに沿う沈線で構成される浅形土器である。形骸化しているが沈線間に交互刺突文が観察できる。

F種－沈線のみで文様を構成する土器(26～31)。

26は底径8.5cmで胴下半が円筒形を呈する土器である。底面は丁寧にナデられている。器面には主に3本一組の沈線で渦巻きと直線を組み合わせた構図を描いている。縦位方向の沈線は12単位(3本一組の沈線が10組、2本一組の沈線が2組)認められる。29は幅広の沈線を縦位に施文している。31は体部下半の破片であり、地文はLR縄文(綾絡文)である。

G種－口縁部に隆線(帯)を装飾的に貼付する土器(32・33)。

32は大型の深鉢形土器であり、口縁部には装飾的な橋状把手が付く。33は波状突起部分に円ないしは渦巻きの構図を採ると思われる隆線を配している。

H種－研磨等による無文の土器(34～36)。

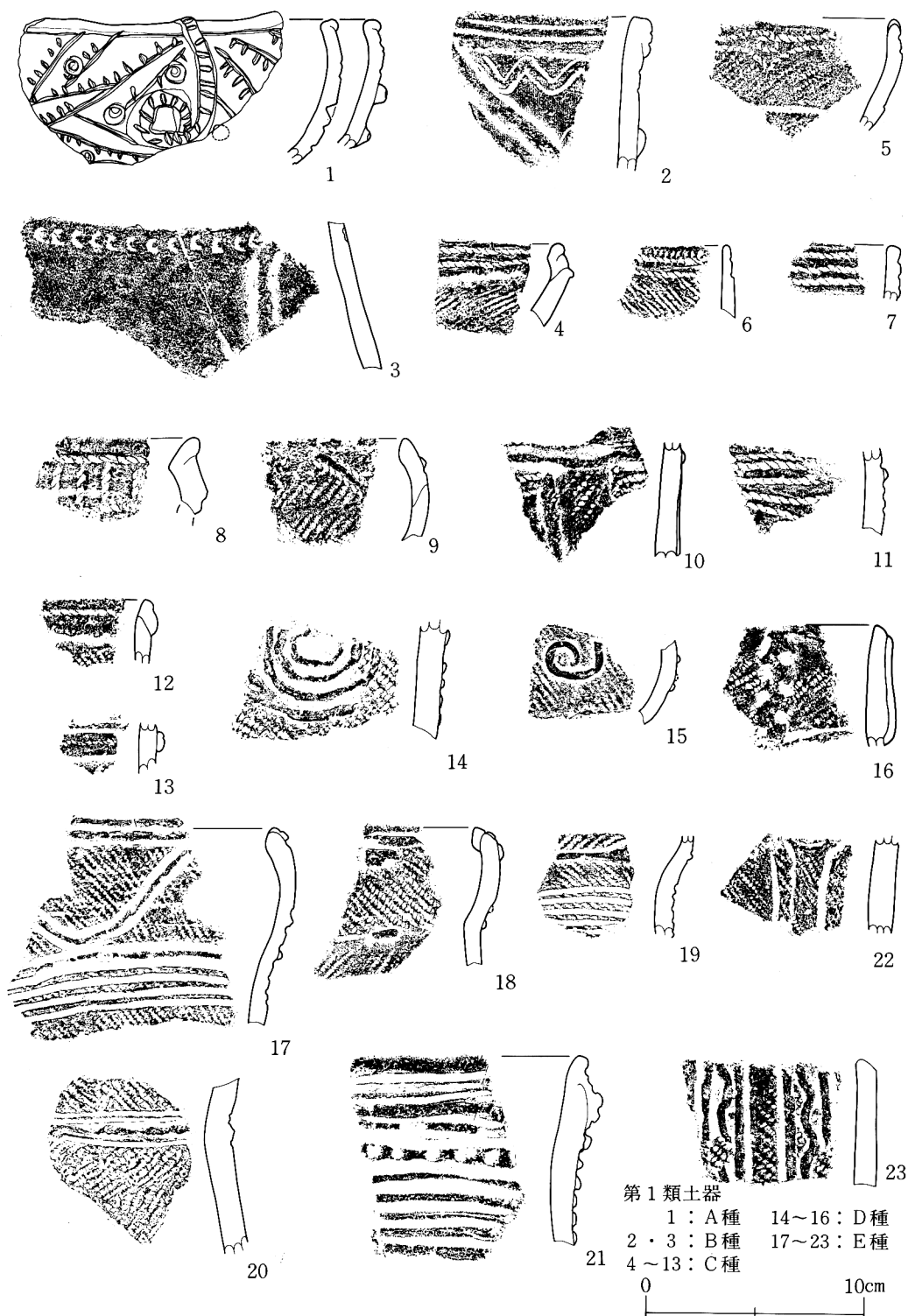
図示した3点とも浅鉢形を呈するものであろう。34は内面口縁部に折り返し状の肥厚部を有する。色調は34、35で黒褐色～灰褐色、36は明褐色を示し、いずれも薄手で焼成良好である。

I種－地文のみの土器(37～57)。

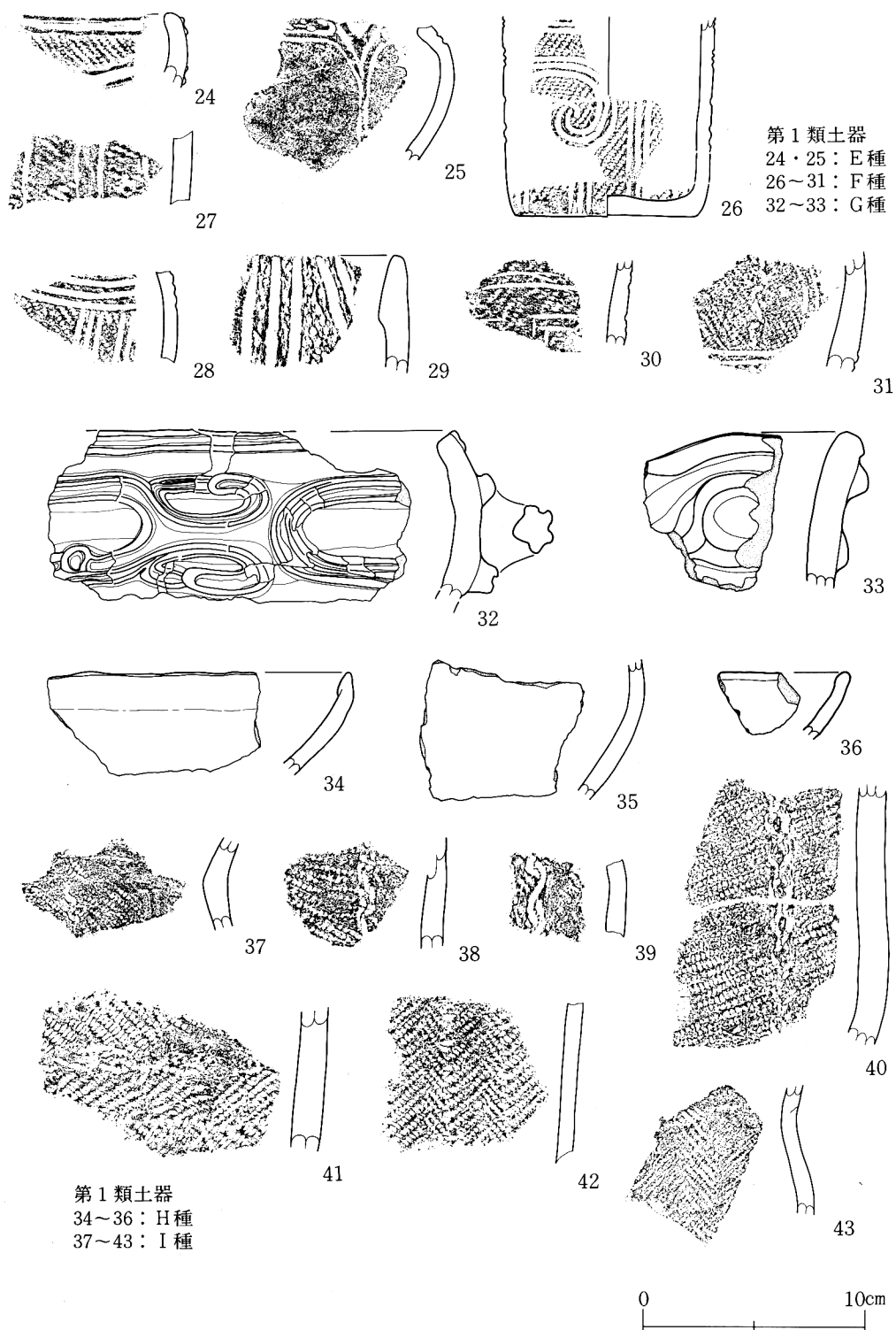
37～40は縄文原体を縦位に回転することによって得られる綾絡文が表出され、41は横位回転による綾絡文が認められる。43、44は縦位回転による羽状縄文、45～57はいわゆる斜行縄文である。使用している原体は単節のLRが多いが、57は無節のLである。

J種－底部資料(58～61)。

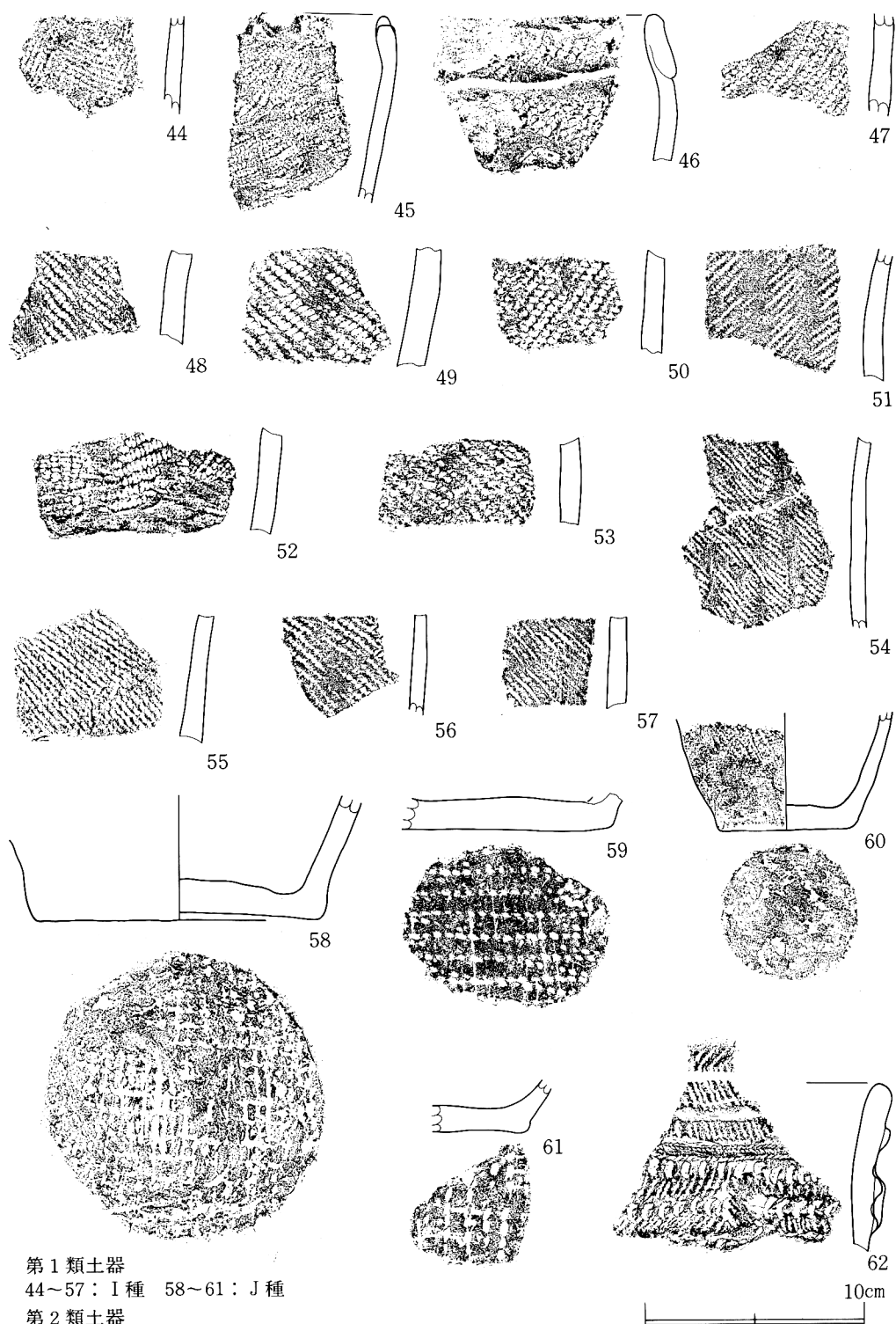
図示した4点とも底面に網代痕を観察できる。採集された底部資料中に占める網代痕をもつ土器の割合は比較的高い。58は底径13cm前後の比較的大型の器形、60は底径6.3cmの小型の鉢



第2図 出土土器(1)



第3図 出土土器(2)



第1類土器
44～57：I種 58～61：J種
第2類土器
62

第4図 出土土器(3)

形土器となる。61を除き、網代痕の上を部分的にナデあるいはミガキを施している。

第2類土器（第4図62）

円筒土器上層式の資料は62に示した1点のみである。図示できなかった細片の中に本類土器が幾らか混じっている可能性を否定はできないものの、その比率はごく微々たるものと考えている。62は胎土に細砂粒を多く含んでいる土器である。口縁部に平行するように3本の隆帯を貼付し、上から2本目と3本目の隆帯にはこれを跨ぐような短い隆帯が縦位に付される。これらの隆帯上には細い縄文(L、Rの2種あり)を斜位方向に押圧している。同じ原体を用いた縄文の押圧は口唇部内外面、1本目と2本目の隆帯間にも横位に認められる。この後、別のやや幅の太い原体(R)を「C」字状(爪形)に折り曲げて隆帯間に押圧している。

4 ま と め

以上、湯沢市山田地区で出土した土器を、器面に表出されている文様の施文手法に着目し分類を行った。その帰属時期は、縄文時代前期末葉～中期前葉の比較的限られた時期を特定できる。従前からの型式名では、大木6～8a式に相当しよう。特に中心をなすのは大木7b～8a式を中心とする土器群との認識で大過ないと考えている。これら土器群の中で古相を示すのが第1類土器A・B種で大木6～7a式に位置づけられる。また1点出土した第2群土器は、円筒土器上層b式と見られる。

湯沢周辺～秋田県南部～で遺物が比較的まとまって出土している前期末葉～中期前葉の遺跡を抽出すれば、田沢湖町黒倉B遺跡(大木7a～7b式中心)、横手市中杉沢遺跡(大木7a～8b式中心)、稲川町欠上り遺跡(大木7a～8b式中心)、十文字町宝竜堂遺跡(大木7b～8a式中心)、などを挙げることができる。これら遺跡の出土土器及び本資料から秋田県南部、すなわち雄物川中・上流域における前期末葉～中期前葉の土器文様の特質～そのごく一部～を列記し、本稿の責としたい。

《前期末葉～中期初頭（大木6～7a式）》段階

半截竹管を工具とする沈線文(鋸歯状、弧状、同心円状など)・刺突文(爪形文)・押引き文、あるいはヘラ状・棒状工具を用いる交互刺突文・刻目文などが多く見られる。7a期には縄文側面圧痕が施文される土器が現れるが、その出現率は極めて低い。該期には、円筒上層a式土器を伴う場合もある(黒倉Bの竪穴住居跡など)。

《中期前葉（大木7b～8a式）》段階

縄文の側面圧痕文、粘土紐貼付による隆線文、ヘラ・棒状工具による沈線文を主な施文手法とし、これらが単独ないしは併用して構成される区画文が多用される。交互刺突文は小例残る

が、前段階に認められた半截竹管を工具とする文様はほとんど消失する。隆線上には基本的に縄文側面圧痕文は施文されないが、稀に存在する。これは円筒上層Ⅱ式土器の影響と考えられる。同土器そのものも少量混じる。

また北陸系の土器も僅かながら含まれる(黒倉Ⅱ、宝竜堂、欠上り、及び稲川町宝竜台遺跡)。宝竜堂では該期の土器に新潟県をその分布の中心とする馬高式土器の意匠を取り入れている。宝竜台では石川県新崎遺跡を標識とする新崎式土器が確認されている。

なお、本文の拓影図、実測図、及びトレースについては、大西英子、島津竜子、藤田悦子、町田京子の方々の協力によるものである。記して感謝申し上げます。

註1 第1図10の土沢Ⅱ遺跡は、山下孫継氏の採集資料から、縄文時代晩期の遺跡として周知されている。遺物には土器と共に石棒、石剣、磨製石斧、石匙などの石器に混じて“中高石皿”も含まれている。この石器は、昨年報告した大館市上ノ山Ⅱ遺跡のまとめ(筆者が担当)において、「県内での類例は、・・・5遺跡8例しかない」としていた。5遺跡とは上小阿仁村小袋袋、鷹巣町藤株、鳥海町上田野、神岡町岳下、横手市上猪岡であり、ここに紙面を借りて“中高石皿”の出土地に土沢Ⅱ遺跡を追加する。

山下孫継 『湯沢市雄勝郡の埋蔵文化財』湯沢市教育委員会 1961(昭和36)年

秋田県教育委員会 『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅱ-上ノ山Ⅱ遺跡第2次調査-』 秋田県文化財調査報告書第193集 1990(平成2)年

《引用・参考文献》

秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(県南版)』 1987(昭和62)年

瀧口宏、西村正衛 「秋田県雄勝郡欠上遺跡発掘報告」『古代』第18号 1956(昭和31)年

稲川町教育委員会 『欠上り遺跡発掘調査報告書』 1990(平成2)年

山下孫継 「宝竜堂遺跡」『北方考古』第7号 1972(昭和47)年

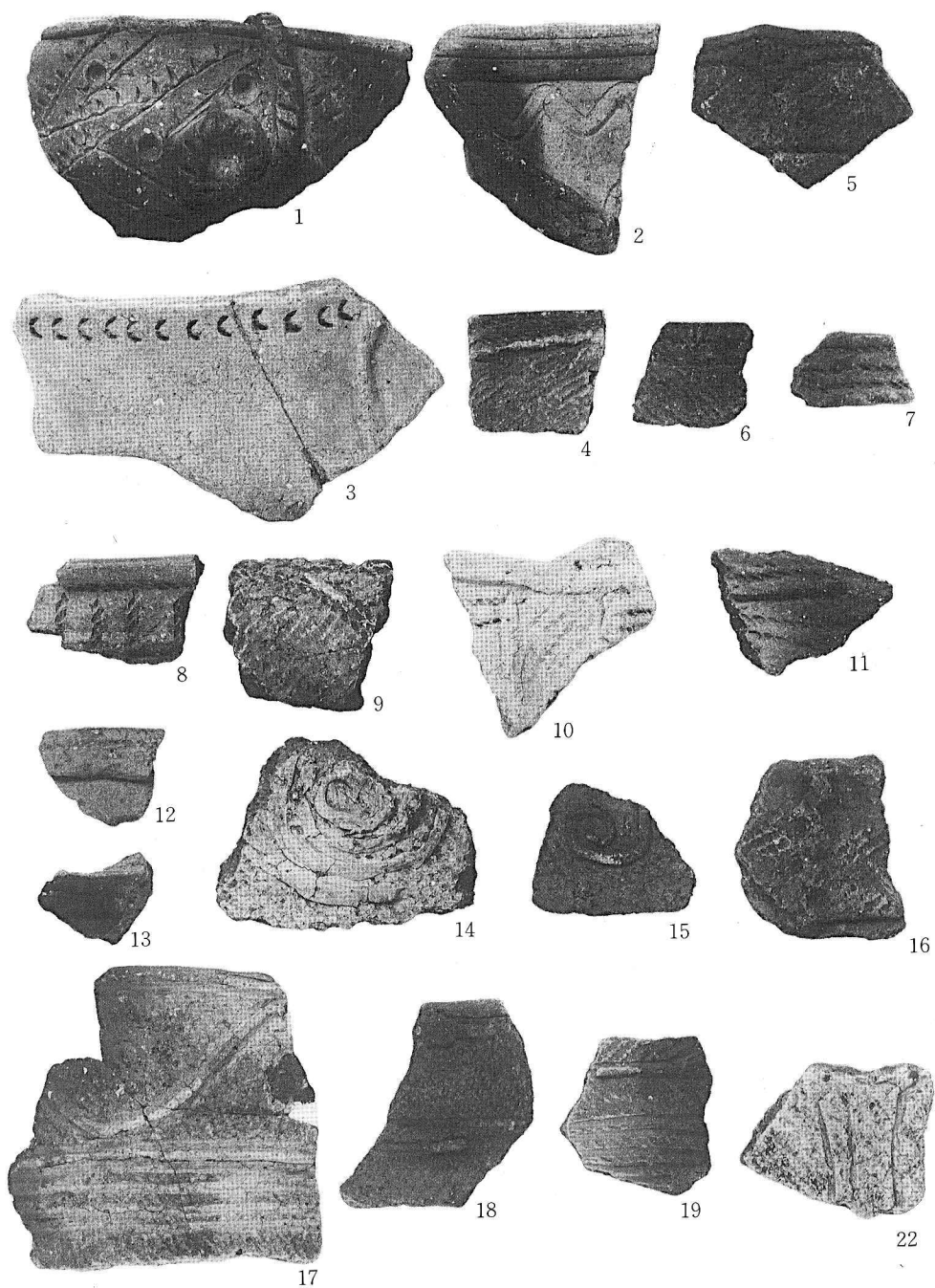
秋田県教育委員会 『宝竜堂遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第214集 1991(平成3)年

田沢湖町教育委員会 『黒倉Ⅱ遺跡-第1次発掘調査報告-』 1985(昭和60)年

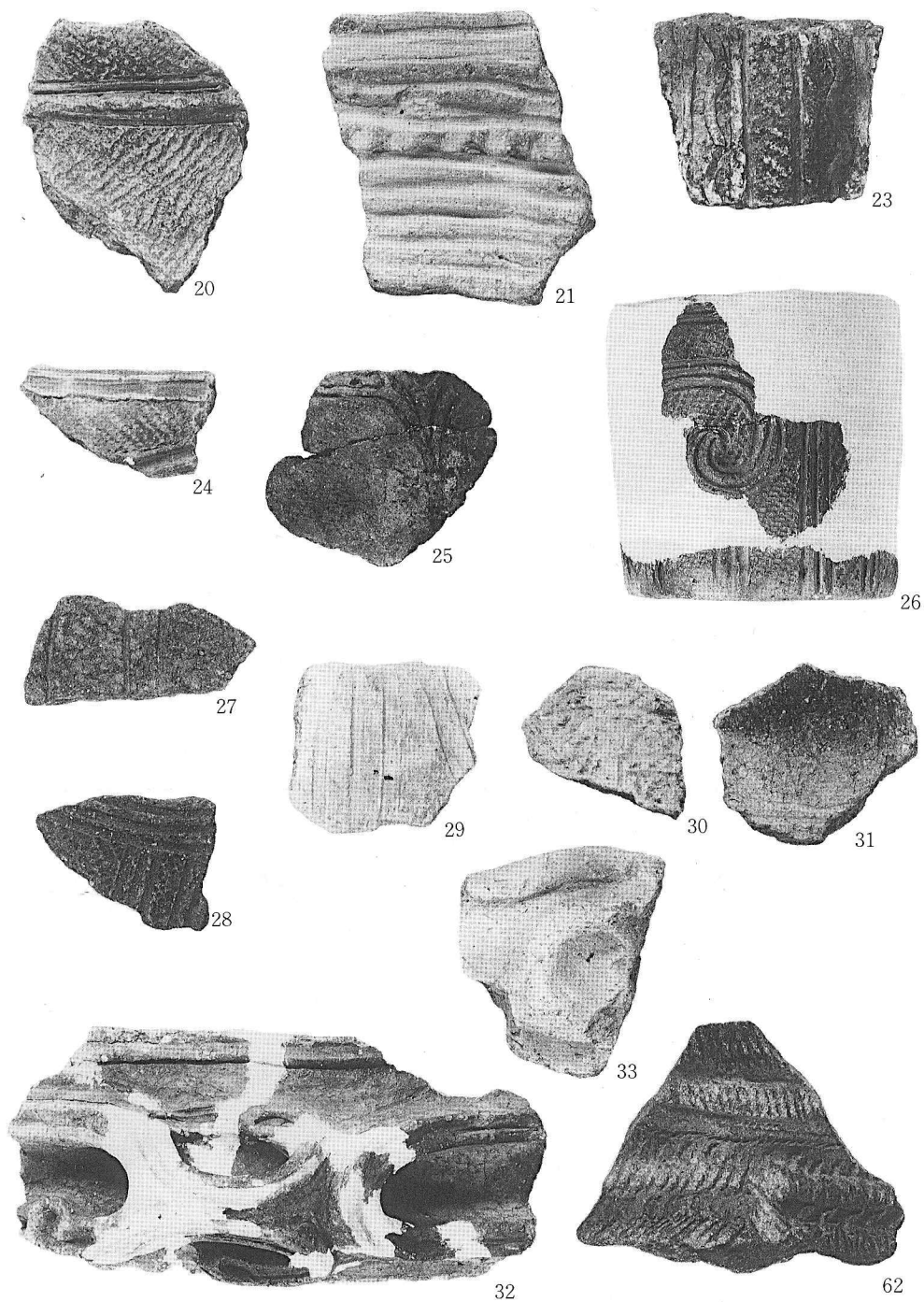
田沢湖町教育委員会 『黒倉Ⅱ遺跡-第2次発掘調査報告-』 1986(昭和61)年

富樫泰時 「秋田県における北陸系の土器について」『本荘市史研究』第4号 1984(昭和59)年

武藤鉄城 『宝竜台石器時代遺跡発掘報告』 1955(昭和30)年



湯沢市山田地区出土の土器(1) (実大の約45%)



湯沢市山田地区出土の土器(2) (実大の約45%、26のみ約48%)